

宮城県特別支援教育将来構想実施計画（後期）の取組状況について

目標	自立と社会参加
主な取組	連携体制の確立（優先課題1）
事業名	4 特別支援教育総合推進事業
担当課	特別支援教育課
事業内容	○個別の教育支援計画作成の手引きの調製 ○個別の教育支援計画作成指導研修会の開催
取組方針・達成目標	障害のある児童生徒への早期の支援及び保護者の障害に対する理解促進を図る一助として、幼稚園や保育所等での引継ぎに関する課題を探り、個別の教育支援計画策定に向けた手引等を調製し、普及を図る。幼稚園や保育所等及び小学校双方からの引継ぎにおける課題やスムーズな移行のために必要事項等を整理・分析、幼稚園・保育所等で個別の教育支援計画作成・実践し、令和6年までに個別の教育支援計画策定運用の充実を図る。また、個別の教育支援計画活用の有効性、手引きの要点・大事な視点等を踏まえた研修会を実施する。
令和3年度事業概要	○令和2年度に作成した「個別の教育支援計画作成のための手引き（就学前）」について、実際に活用する場合の支援のために、研修会（年2回）や発達早期支援事業と連動した相談支援を行う。 ○手引きの作成に関係した有識者を招き、手引きの要点、視点を踏まえながら記載の方法について研修を行う。

視察事業名	切れ目ない支援体制の取組【オンライン研修】	視察実施日	令和3年10月30日
評価ポイント	(1) 実践内容について (2) 普及推進の視点から見た本事業の取組について		
意見・感想	<p>(1) 実践内容について</p> <ul style="list-style-type: none"> ○テーマを「なぜ就学前に個別の教育支援計画が必要か」「必要だとしてどのように作成し活用するか」に絞っており、次回の研修に向けて期待できる。 ○理解と支援が適切でないために保護者との信頼関係などが構築されず困っているケースもある現状の中で、「個別の教育支援計画」を作成し活用する今回の研修は意義がある。 <p>(2) 普及推進の視点から見た本事業の取組について</p> <ul style="list-style-type: none"> ○特別支援学校高等部や高等学校卒業後において、「切れ目ない」が切れてしまうことがよくあり、課題である。 ○「気になる子」だけでなく他者を支える視点が必要であり、子ども同士が自分との違いを認める力、思いやる力を育むことで「気になる子」の自己肯定感も高まり、健やかな成長につながるのではないかと。 ○園の上層部等が個別の教育支援計画の必要性を重視し、担任が作成する時間を設けることが重要と感じた。 <p>(3) その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「気になる子」の捉え方に発達障害への偏りが感じられる。障害ごとの理解と配慮、対応についての講義など具体的な取り組みが必要。関係機関情報に聞こえは聴覚支援学校、見え方は視覚支援学校を記載すべき。 ○就学相談について、保護者が悩み苦しむことのないよう相談体制を作っていただきたい。 ○子供自身が「障害があるけども受け入れてくれる家庭がある」と思えること、家族に限らず例えば先生に認めてもらうこと、自分の居場所があること、つまり「自己肯定感の確立」が重要であると思う。 		

宮城県特別支援教育将来構想実施計画（後期）の取組状況について

主な取組	共に学ぶ教育の推進（優先課題3）		
事業名	8 共に学ぶ教育推進モデル事業		
担当課	特別支援教育課、県立特別支援学校、市町村教委、小中学校等		
事業内容	○モデル校による支援体制の構築 ○共に学ぶ教育推進検討会の開催		
取組方針・達成目標	令和2年度に第Ⅱ期共に学ぶ教育推進モデル事業の3年目を迎えるに当たり、第Ⅱ期の課題の整理と第Ⅲ期共に学ぶ教育推進モデル事業（令和3年度～令和5年度）実践校の選定を行う。また、令和4年度中に令和6年度以降の事業推進の在り方を提示する。		
令和3年度事業概要	第Ⅲ期 共に学ぶ教育推進モデル事業（令和3年度～令和5年度） ○地域における一貫した支援体制の構築を目指したモデル校の設定 角田市〔桜小学校（R4～北郷小追加）、北角田中学校、角田高校〕 大崎市〔松山小学校、松山中学校、松山高校〕 ○ユニバーサルデザインの考え方を取り入れた教育活動〔授業や学級経営の実践〕 ○第Ⅱ期実践発表フォーラム ○令和3年度外部専門家等関係者連絡会		
視察事業名	インクルーシブ教育システムの構築 【松山小学校・桜小学校】	視察実施日	令和3年11月1日【松山小学校】 令和3年11月16日【桜小学校】
評価ポイント	(1) 実践内容について（支援体制づくり等） (2) インクルーシブ教育の取組について（ユニバーサルデザイン視点の授業、学級経営等） (3) 専門家チームの活用方法について（効果的な活用等）		
意見・感想	<p>(1) 実践内容について（授業研究や研修の実践、合理的配慮の蓄積や校内体制作り等）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○授業実践が協働しながら進めている体制がとられ合理的配慮の理解と実践が共有できています。 ○「支援の手立てや教材」「クラスや対象児が混乱しているときの対応」などについて先生方同士で授業場面で支援的対応・教材等の情報交流のための事後検討会が必要。さらに「半年以上のスパンで見た子供の変容」などを、事後検討会での「必須検討事項」として設定する必要がある。 ○現状のままでは、「配慮の必要な子どもがいる学級」での「一般的な授業の研究」に陥るとの、危惧を覚えた。 ○管理職の「自分も学びながらこの事業を推進していく」という気持ちが職員のモチベーションにつながると思う。 ○「共に学ぶ教育推進モデル事業」指定校として、校長先生のリーダーシップの下、一丸となって取り組んでいる一方で、ユニバーサルデザインという言葉に振り回されている感じがしないわけではない。 ○今やどの小学校にもいると思われる児童の指導を学級、学校全体で個別にどのように展開し、体系化していくことも事業のねらいのひとつと考える。 <p>(2) インクルーシブ教育の取組について（ユニバーサルデザイン視点の授業、学級経営等）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○授業づくりの協働作業の中でユニバーサルデザインを軸にした取組が見られる。 ○訪問校にも、配慮が必要な児童とされる以外の子どもにも、その際の必要性に応じて、子ども自身の希望で使用するための選択可能な教材など、支援に係るいくつかのレパートリーを提示する必要があると思う。 ○少し残念であるがT2の教員が時々、対象児童に声がけする程度では、ユニバーサルデザイン視点の授業とは言い難いとの印象を受けた。 ○特別な支援を受けている児童に対するアプローチがもっと明確に示されていることが必要である。 ○保護者等にも理解について、説明できるよう、学校全体で共有しておくことが大事。視点の焦点化を図ることも大切。 <p>(3) 専門家チームの活用方法について（効果的な活用等）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○専門家からの指導・助言の機会は限られているため多くの専門家から同時に助言頂くよりも限られた少数の専門家から継続的に複数回にわたって行うのも1つの方法かと思う。 ○「混乱している時の対応」の具体例、「半年以上のスパンで見た子供の変容」の追跡方法などの情報提供を学校側からお願いするべきだと思う。「支援の手立てや教材」は、学校側の検討事項であり、その成果を専門家チームに伝え、議論することが望まれる。 ○専門家からの指導助言は続けてほしい。専門家が授業づくりの段階から関わる機会があればユニバーサルデザインの授業づくりがより実感できると思う。 ○専門家チームのコメントが素晴らしい。コメントを日々の授業で生かせば、学校全体としての授業改善につながると思う。 <p>(4) その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ○初任研（2年目）の研究授業と、「共に学ぶ・・・」の授業を組み合わせる点については、参観者の前で授業するだけでも大変であり違和感を覚えた。 ○配慮の必要な子どもたちに適切な対応をするのは、ある意味で至難の業であり、その検討対象の授業としては、もうひと工夫欲しいと思った。 ○事業に関わった教員が確実に増えていることは希望である。全ての学校で「共に学ぶ教育」が推進されることを期待したい。 ○共に学ぶ教育は、どの小・中学校でも目指していかなければならない教育であり、松山小学校の取組が広がるよう情報発信を活発に行ってほしい。 		

宮城県特別支援教育将来構想実施計画（後期）の取組状況について

主な取組	通級による指導の推進（優先課題2）
事業名	10（非予算事業）
担当課	特別支援教育課，義務教育課，高校教育課，小中学校等，高等学校等
事業内容	○学級担任等と通級による指導担当教員の連携 ○小・中学校等，高等学校等での切れ目ない通級による指導の実施
取組方針・達成目標	○校内における発達障害等のある児童生徒への学習保障の観点から，校内全教職員に対する障害の理解や校内の環境整備に関する研修等の実施に対する支援を行うことにより，通級による指導に対する理解と連携・協力体制の構築を進める。 ○通常の学級に在籍する障害のある児童生徒を含め，個別的教育支援計画及び個別の指導計画の確実な作成・引継ぎを行うことにより，小・中学校等，高等学校等において希望する児童生徒に対して，切れ目ない通級による指導を実施する。
令和3年度事業概要	共に学ぶ教育推進モデル事業通級モデル校（松山高）において高等学校における特別支援教育の校内体制整備の構築と通級による指導及び通常学級におけるユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりを行い県内高校に情報発信・共有を行う。

視察事業名	多様な教育的ニーズに対応した教育環境【貞山高等学校】	視察実施日	令和3年11月9日，令和3年11月16日
評価ポイント	<p>(1) 実践内容について（支援体制づくり等）</p> <p>(2) 普及推進の視点から見た本事業の取組について</p>		
意見・感想	<p>(1) 実践内容について（支援体制づくり等）</p> <p>○通級対象の生徒のみではなく，全体にユニバーサルデザインの視点が生かされていることが素晴らしい。就職後において企業にも「発達障害への合理的配慮」を広く普及させる必要性を感じた。</p> <p>○校内委員会や学級担任・教科担任との連携など，支援体制の整備が今後の課題である。</p> <p>○対象生徒との信頼関係が構築されている様子が伺われた。他の高校でも支援ニーズのある生徒はいると思われるので，貞山高校で校内支援体制を整備し，それをモデルとして他校にも広げていけたらと思う。</p> <p>○通級専任教員には発達障害に関する専門知識以外に，心理カウンセリングの技術も求められるため，今後，担当教員の研修の質と量を充実させていくことが課題である。</p> <p>○生徒との程よい距離感の中で信頼関係を気づけており，きめ細やかな指導であると思う。しかし，専任の教員が学校に1名という点が残念。</p> <p>○通級担当教員以外にも特別支援教育コーディネーターを配置するなど学校全体で取り組んでいる印象をもった。</p> <p>○高校においては，本人のモチベーションやニーズを大切にしていけると充実した学びにつながると思う。</p> <p>(2) 普及推進の視点から見た本事業の取組について</p> <p>○高校においてに通級による指導を行っていることを広報していくことで，さらに希望する生徒も増えると思うが，広報によって希望者が増加すれば対応しきれなくなるとの回答があった。実際にニーズがあるとすれば県全体でそれを把握し対応を検討すべきと考える。</p> <p>○他校へ広がることで，支援を必要とする生徒や保護者が抵抗を感じずに指導を受けられると考える。</p> <p>○高校は子どもたちが社会へ旅立つ前にソーシャルスキルやライフスキルを丁寧に指導できる最後の場である。今後，発達障害のある生徒に対応した通級による指導の整備が喫緊の課題であり，支援ニーズのある生徒へ個別に対応していくことが不登校や学校不応，退学を防止することにつながる。</p> <p>○先進校の取組は参考にしつつ，各校で実態に合わせた通級のあり方を考えていくことが必要と感じた。大学の学生相談室も各大学の特色を生かしているの参考になる部分もあるのではないかと感じた。</p> <p>○小学校で通級や情緒学級に在籍していても，中学校に入学して通級がなかったりなどと普通学級在籍となった場合の合理的配慮や保護者への支援がまだまだ足りないと感じた。</p> <p>○モデル校の成果（変容）と課題を踏まえ，事業を広く紹介し，拡充・拡大を図ってほしい。</p> <p>(3) その他</p> <p>○貞山高校は定時制・単位制の特性を生かした取組，通級による指導の体制は比較的とりやすい反面，学級や他教科担任との協力体制が今後の課題となる。</p> <p>○対象生徒が生き生きと学習しているのが印象的であった。</p>		

宮城県特別支援教育将来構想実施計画（後期）の取組状況について

主な取組	通級による指導の推進（優先課題2）
事業名	10（非予算事業）
担当課	特別支援教育課，義務教育課，高校教育課，小中学校等，高等学校等
事業内容	○学級担任等と通級による指導担当教員の連携 ○小・中学校等，高等学校等での切れ目ない通級による指導の実施
取組方針・達成目標	○校内における発達障害等のある児童生徒への学習保障の観点から，校内全教職員に対する障害の理解や校内の環境整備に関する研修等の実施に対する支援を行うことにより，通級による指導に対する理解と連携・協力体制の構築を進める。 ○通常の学級に在籍する障害のある児童生徒を含め，個別的教育支援計画及び個別の指導計画の確実な作成・引継ぎを行うことにより，小・中学校等，高等学校等において希望する児童生徒に対して，切れ目ない通級による指導を実施する。
令和3年度事業概要	共に学ぶ教育推進モデル事業通級モデル校において高等学校における特別支援教育の校内体制整備の構築と通級による指導及び通常学級におけるユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりを行い県内高校に情報発信・共有を行う。

視察事業名	多様な教育的ニーズに対応した教育環境【泉松陵高等学校】	視察実施日	令和3年11月26日
評価ポイント	(1) 実践内容について（支援体制づくり等） (2) 普及推進の視点から見た本事業の取組について		
意見・感想	<p>(1) 実践内容について（支援体制づくり等）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○生徒個人に合わせた丁寧なかかわりで，自信と安心につながり自己肯定感の向上が期待できると思った。 ○発達に課題を抱え，うまくコミュニケーションが取れないお子さんが増えているように感じ，家族以外の人でも安心してかかわりが持てるよう，このような場が各学校において展開されることを期待する。 ○第3学年時の8月には指導の成果が出ていないと就職や進学に間に合わないため，通級による指導は第2学年時から始められるよう体制を整えたほうが良いと感じた。 ○教員は数年で異動が前提という立場において生徒を継続的にフォローしなければならないという苦勞が何えると同時に，一人のキーパーソンによらない支援が必要と感じた。 <p>(2) 普及推進の視点から見た本事業の取組について</p> <ul style="list-style-type: none"> ○中学までは特別支援学級や通級による指導で丁寧にかかわっていると思うが，高校では地元から離れ大きく環境が変わる方もいる。 ○学校全体が通級による指導を当たり前のこととして受け入れられるか否かが，普及の成否を分けて考えており，そのためには本務職員をT2として配置することが重要だと考える。 <p>(3) その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ○高校生でこのレベルから入らなければならないのかと少し驚いた。もっと早い時期から介入されていれば高校時には進学や就職に目を向けた指導に特化できるのでは，もっと早い時期から支援されていればこの時期で戸惑うことは少ないかと思う。 ○発達に課題を抱えるお子さんの支援について，もっと関係機関の連携が図れ，本人，家族が安心した教育を受けられることを期待する。 ○新しい取り組みに果敢にチャレンジしているのがよく分かった。新たな取り組みに対して一部の職員ではなく，学校全体がそれを推進するという気持ちを持つようになればよいと考える。 <p>※医教連携の取組について</p> <ul style="list-style-type: none"> ○病気のため学ぶ機会が失われることは，とても悲しいことだと思うことから，生きていく上での励みになるよう，広域で展開されることを期待する。 ○医教連携はこれから課題を洗い出されると思うので，どんどんチャレンジして可能性を広げてほしい。入院生徒への勉強以外の支援が重要だと改めて感じた。 ○入学後クライメイトと関係を構築している生徒と，入学前から入院しオンラインのみの関係構築ではアプローチの仕方が異なると考える。勉強以外のフォローアップの必要性を感じる。 ○通級指導担当者の役割として，他校や関係機関のスーパーバイザー的な役割を求められていると感じた。 ○長期入院をしている高校生の学習支援について，インターネット環境のインフラ整備は，障害児者への生活に必要不可欠であり，助成対象になりえると考えられるので，県において独自の支援制度の構築や，市町村への支援も考慮いただき，国に対しても財政的な支援を求めているいただきたい。 ○学習支援だけでなく，クラスメイトとの関係構築など，勉強以外のフォローアップの必要性を感じる。 ○医教連携は入学時のクラスづくりが課題と感じた。一度人間関係が出来れば長期入院中もクラスメイトが友人として接することができ，入院生徒の孤立感が緩和されると考える。 		